

quaerere と 照 明 説

— アウグスティヌス『教師論』による —

小 沢 和 道

序

1. 15歳の息子アデオダトゥスとの対話で進められるアウグスティヌスの『教師論』(389年)は、彼の照明説を考察する上で興味ある問題を種々提起する。わけても、この書に於て展開される res と signum をめぐる認識の問題は、彼の照明説形成のための重要な思想的モチーフとなっている。又、この書に於ける彼の認識論の特徴を示す quaerere, commemorare, consulere などの用語もこの問題と深く結びついて出てくる。そこで我々は、この res と signum をめぐる認識の問題を端緒として、『教師論』に於けるアウグスティヌスの照明説の「形成モチーフ」を探ってみることにしよう。

I

2. これをめぐって『教師論』では次の3点が問題とされている。①何もしるしなしには教えられ得ないのか ②ある種のしるしは、それが意味表示するものよりも優れていなければならないのか ③ものゝ認識それ自体の方がしるしよりもよいものであるのか。⁽¹⁾この内の第2点は十分に展開されないうちで途中で放置される。そこで我々は第1点と第3点とを取りあげてみることにしよう。

3. 第1点の「何もしるしなしには教えられ得ないのか」については次のように進められていく。言葉はしるしであり、しるしは何か (aliquid) を意味表示するのであれば、一つ一つの言葉によって意味表示された aliquid, 即ち, res はいかにして我々に示され得るのか、という問題に端を発した res の探求は、言葉乃至はしるしによらないで res そのものを示すことができる方法はないのか、という探求を経て、し

るしなしにそれ自体によって (per se ipsam) 示される res そのものゝ探求へと展開されていく (2・3~3・6)。その結果、しるしなしにそれ自体によって示される res として「話す」loqui と「教える」docere の2つが一応見出されたかに見えたが (3・6, 10・29), しかしよく吟味すると、これら loqui も docere もしるしなしには示され得ないものであることが判明する。かくして「何もしるしなしには教えられない」という結論に達する (10・31)。

しかしこの結論にアウグスティヌスもアデオダトゥスも満足せず、続く32節でアウグスティヌスはこの結論を否定して次のように言う、「あることをある人達にはしるしなしに教えることは出来るのであり、しるしなしに示すことの出来るようなものは全くないと私達が少し前に考えたことは誤りである。」そしてこれを裏付ける実例をいくつか挙げた後に更に続けて彼は言う、「恐らく君は自らのしるしによって学ばれるようなものを何も見出しはしないだろう。なぜなら、私にしるしが与えられる時に、それがどんなものゝしるしであるのかを私が知らない、ということとそのしるしが見出したとすれば、そのしるしは私に何も教えることは出来ないからであり、他方、それがどんなものゝしるしであるのかを私が知っている、ということとそのしるしが見出したのであれば、私はそのしるしによって何を学ぶのであろうか。」⁽²⁾

つまり、ある signum がいかなる res の signum であるのかという判断は res そのものゝ知 (notitia) が既に我々の内に無ければ成立たない。従って res の知は signum の知に先立つのであるから、signum を通して res が学ばれる、即ち、認識される、ということはあり得ないのである。ところで、res そのものゝ知は我々はその res を見ることによって (uidendo) 我々の内に生じる。かくしてアウグスティヌスは次のように結論して言う、「私はものを意味表示によってではなく自ら見ることによって学んでいた。だから、しるしと与えられて後にもものそのものが学ばれるのではなく、ものが認識されて後にしるしと学ばれるのである。」⁽³⁾

4. ではこのような結論が照明説の考察にとっていかなる意味をもつのであろうか。我々は res を見ることによって学ぶという事態は、何よりも先ず、我々の認識一般の在り方を根本的に規定する。つまり、これによれば、認識とは認識主体が「見る」

という行為を通して *res* に直接出会う所に成立つものであり、かゝる認識理解より、後に述べる如く（本文12, 13節, 註(10)参照）、「たずねる」*consulere* というアウグスティヌス特有の認識の事態が引き出されてくる。そしてこの「たずねる」という認識の事態が、我々の感覚認識の場面より知性認識の場面へと深められ内向化されていくに従って、知性認識の本来的には直観的たる所以が次第に明きらかとされていく。しかしかゝる事態は更にこれをも越えて必然的に照明説そのものへと形を整えていく。なぜなら、アウグスティヌスによれば、知性の直観的認識を完成させる所以は神の照明作用に他ならないのであるから。

5. さて、こゝで次のような問題が残される。即ち、ものはそれ自体によって直接認識されるのであれば、ものゝ認識にとってしるしは最早や何の意味ももたなくなるのであろうか、それとも尚も何らかの意味をもち得るのであろうか、という問題である。これをアウグスティヌスは10・35と11・36に於て、*res* 認識に於ける言葉の機能の問題として論ずるのであるが、この問題は、最初に述べた第3点、「ものゝ認識それ自体の方がしるしよりもよいものであるのか」という問題と内的に深く連関する。そこで我々はこの第3点を考慮しつゝ「言葉の機能」の問題へと歩を進めてみよう。

II

6. 第3点については次のように進められていく。ものとしるしの優劣関係、及び、ものゝ認識としるしの認識の優劣関係は簡単には決定できないが、しかし、ものゝ認識 (*cognitio rei*) はしるしよりも優れていなければならない(9・25~28)。なぜなら、「他のものゝゆえに存在するところのものはすべて、それがそのゆえに存在するところのものよりも劣っている」*omne, quod propter aliud est, uilius esse quam id, propter quod est* のであり、正にしるしとものゝ認識との関係はこれに当てはまるからである。つまり、*signum* は *cognitio rei* のゆえに (*propter*) 存在するのであり、従って、*signum* は *cognitio rei* のゆえに用いられるものとして *cognitio rei* に従属する、つまり、劣る、のである。

7. では、こゝに言う「劣る」とはどういう意味なのであろうか。それは言葉の機能を考察していくに従って次第に明きらかとなる。そこで我々は *signum* を言葉 (*uerbum*) に置き換えてそのことを考えてみることにしよう。その際、アウグスティヌスの挙げる次のような例(10・35)が考察の手がかりとなる。

私が *sarabarae* (頭巾) というものを知らなくて、誰か「ほら、サラバラエだよ」と言って私の注意を促し、そのサラバラエというものを教えてくれたとしよう。この場合、私がサラバラエを学び得たのはサラバラエというその当のものを見ることによって (*per eius aspectum*) であって、彼の言った言葉によってではなかった。

この例から我々は「言葉の機能」に関して次のような理解を得るであろう。即ち、言葉の機能には *res* それ自体の把握に迄及ぶ力の広がりには属さない。とはいえ、認識者の注意・眼差 (*aspectus*) が誤りなく未知の *res* に向かい得たのは他者の言葉を契機としてである。それ故、*res* 認識の過程に於て言葉は全く機能的に関与しなかったわけではなく、ある限界をもったそれ独自の仕方に関与していたのである。この事態をさしてアウグスティヌスは次のように言う、「確かに、私がものそのものを学んだ時、私は他人の言葉を信頼したのではなく、私の眼を信頼した。にもかかわらず、彼等の言葉を信頼したのは、恐らく、私が注意を向ける為、つまり、私は何を見るべきなのかを眼差によって探求する為になのである。」⁽⁴⁾

このことから、他者の言葉は未知の *res* に認識者を向かわせる機能を有する(言葉の機能の積極面)が、その *res* を把握させる力迄はもたない(その機能の限界面)ということが理解されるであろう。

8. 続けてアウグスティヌスは言う、「私が言葉に最大限のものを割り当てようとするれば、言葉が効力を有するのはこの点までである。つまり、言葉は、単に私達⁽⁵⁾がものを探求するようにと促すに過ぎず、ものを私達が知るために示しはしないのだ。」

つまり、言葉はものを探求すること (*quaerere*) に関わり、ものを知ること (*nosse*) に迄は関わり得ないのである。ところで、*quaerere* は *nosse* を目ざすものである。が、この「目ざす」という点に於て *quaerere* は *nosse* に劣る。従って、*quaerere* に関わるに過ぎない言葉乃至はしるしも又、*nosse* 即ち *cognitio rei* に劣るもので

あると言えよう。我々が先に第3点について「signum は cognitio rei に劣る」と述べたことは、ひっ竟、「quaerere は nosse に劣る」ということに基づくものであったということがこれによって理解されるであろう。

9. さて、問題は quaerere から nosse への深まりがいかにしてなされるのか、である。そのためにアウグスティヌスは先ず我々の認識の在り方を説明して次のように言う、「言葉が発出された時、それらが何を意味表示するのかを私達は知っているか知っていないかのいずれかである。もし私達が知っているのであれば、私達は学ぶよりもむしろ想起する。ところが私達が知らないのであれば、私達は想起さえしないで恐らく探求する⁽⁶⁾ようにと促されるのである。」

言葉が意味表示する res を我々が知っているか知っていないかによって問題の所在が異なる。知っている場合には、既に知っているその res を我々が想起すること (commemorare) によって認識は成立つ。ところが、知らない場合には、まだ知らないその res を我々が探求すること (quaerere) が認識の課題となる。かくして認識の在り方は2通りに理解される。「想起」による認識と「探求」による認識とであり、前者は既知の res に関わり、後者は未知の res に関わる。

10. ところで、このようにして得られた認識理解がアウグスティヌスの照明説の考察にとっていかなる意味をもつのであろうか。

それよりも先ず、人間の認識作用に於て「想起」と「探求」とはいかに関係しあうのか、又、その内のいずれか一方が優位を占めるのであろうか、更には、その内のいずれが照明説形成の主要モチーフとなるのであろうか、等々の疑問が浮かぶが、しかしこれらの点についてアウグスティヌスは全く触れていない。従って、我々は我々なりの解釈を通してこの「想起か探求か」の問題を進めていかざるを得ない。そこで我々なりに次のような解釈がゆるされはしないであろうか。即ち、

照明説と結びついていくのは探求による認識の立場の方である。その理由は次の通りである。照明説に於て問題とされる認識の対象は「真理」ueritas ないし「真」uera であるが、これは「ある意味で」我々の本性的な認識能力を超えたものである。従って、それは我々には先ず未知のもの、即ち、探求されるべきもの、としてある。

ところで、一般に探求とは他者の言葉に導かれて対象に向かうことであり（本文7、8節）、この事態より‘consulere’というアウグスティヌス特有の認識理解が生まれてくる。そして、このような探求が特に知性認識の場面に於て営まれ、終には、「真理にたずねる」consulere ueritatem 程に迄深められゆくところに『教師論』に於けるアウグスティヌスの照明説の重要な形成モチーフが見られるのである。

III

11. では、「探求」はいかにすれば「真理にたずねる」に迄深められるのであろうか。

先に見た如く（本文9節）、探求は未知の res に関わるのであるから、探求を促す最初の契機は「信じる」credere であると考えられる。この credere の問題についてアウグスティヌスはイザヤ書7章9節の「あなた方は信じなければ、知解しないだろう」Nisi credideritis, non intellegetis を引用し、続けて次のように言う、「それ故、私も又自分の知解するものを信じている。が、私も自分の信じるものすべてを知解しているわけではない。⁽⁷⁾」

この彼の言葉より我々は次のような理解を得る。即ち、credere は intellegere よりも対象範囲の広い認識である。つまり、credere の対象範囲には intellegere によってはとらえることの出来ない部分がある。しかしその部分も何らかの意味で人間の意識作用の対象となり得る。では、それはいかにしてなのか。

続けて彼は言う、「だから、自分の知らない多くのことを信じることも又どんなに有益であるのかを私は弁えている。⁽⁸⁾」

つまり、intellegere という仕方ではとらえることの出来ない対象、従って、我々には尚も未知の対象は、先ず、credere という仕方でも認識され、次に、この credere を媒介として次第に intellegere の対象範囲に引きこまれゆくのである。

12. では intellegere そのものはいかにして成立つのであろうか。この問題は11・38～12・40に亘って述べられるが、先ず、38、39節では‘consulere’という観点より、知性認識の問題が感覚認識の問題と対比されて述べられる。

38節の冒頭でアウグスティヌスは次のように言う、「ところが、私達が知性認識

するすべてのものについて、私達は、外から声をかけてくる話者にではなく、内側から私達の精神そのものをつかさどる真理にたずねる。が、恐らく、真理にたずねるようにと私達を促したのは言葉である。」 De uniuersis autem, quae intellegimus, non loquentem, qui personat foris, sed intus ipsi menti praesidentem consulimus ueritatem, uerbis fortasse ut consulamus admoniti.

res についての知が他者の言葉を通して外から我々に伝達されるということがあり得ぬ以上、可知的なもの (res intelligibiles) の探究の眼差は、我々自身の内的世界そのものに向けられねばならず、その探求は真理そのものに肉迫せんとする我々自身の極めて主体的な営みとなって展開される。

さて、こゝで「つかさどる」と訳した praesidere (<前に prae+座る sedere) には「守護する」と「支配する」との意味が含まれる。つまり、真理は、我々の精神をつかさどるものとして、我々の精神よりも上位にあるが、しかも、我々の可知的なものゝ探求を内側から守護する、つまり、支えてくれるのである。

又、consulere は「専門家に相談する、たずねる」という意味であり、このことから次のことが言えよう。「たずねる」という限りに於て我々の探求は能動・主体的に営まれる。しかし、可知的なものについての「専門家」は真理の方であって我々ではない。従って、かかる探求の結果は、可知的なものについての知を我々はそれの「専門家」たる真理から答えてもらう、即ち、教えてもらう、という具合に全く受動的となる。これについて、アウグスティヌスは次のように言う、「たずねられる人は教えるのであり、彼は内なる人の中に住んでいると言われ、即ち、キリストである。」 Ille, qui consulitur, docet, qui in interiore homine habitare dictus est Christus, こゝで真理とキリストとが結合されており、従って、真理にたずねるということは、キリストにたずねるという極めて人格的・宗教的な営みとして理解⁽⁹⁾されている。

更に続けて、感覚認識の場合には、「可視的なものについてはこの外なる光にたずねる」と述べられていることから類推して、知性認識の場合には、真理は可知的なものに対して光としての作用を及ぼすということが知られる。この真理と光の結合は照明説の確立にとって重要な契機となる。

13. 続く39節では感覚認識との明瞭な対比のもとに知性認識について次のように言われている、「もしも私達が、色については光にたずね、身体を通して私達が感覚するその他のものについては私達が感覚するそれら諸物体を構成するところのこの世界の構成諸要素と諸感覚そのものにたずねるが、しかし、知性認識されるものについては内なる真理に理性によってたずねるならば云々。」⁽¹⁰⁾ Quod si et de coloribus lucem et de ceteris, quae per corpus sentimus, elementa huius mundi eademque corpora quae sentimus sensusque ipsos, ..., de his autem, quae intelleguntur, interiorum ueritatem ratione consulimus,

つまり、感覚認識とは、認識者が外界及び外的感覚にたずねることであり、その意味で認識主体 mens よりも外なる世界にたずねることである。ところが、知性認識とは、認識者が ratio を通して自分の内に向かってたずねていくことであり、その結果 mens は自分を越えたところで自分を支配する内なる真理、光、キリストに出会い、そしてこれにたずねる (consulere ueritatem)。

14. このように mens の quaerere は consulere ueritatem に迄深められたが、これに引き続いて、では知性認識はいかにして完成されるのか、という問題が生じるであろう。この問題に彼独自の仕方でもって答えるのがアウグスティヌスの所謂「照明説」であり、それは40節の冒頭に次のように述べられる、「精神、即ち、知性と理性によって私達が見つめるところのものが問題である時に、無論私達は真理のあの内なる光の中でそのあるがまゝに直視するところのものについて語る。その内なる光は、内なる人と言われるものを照明して歓喜させる。」 Cum de his agitur, quae mente conspicimus, id est intellectu atque ratione, ea quidem loquimur, quae praesentia contuemur in illa interiore luce ueritatis, qua ipse, qui dicitur homo interior, illustratur et fruitur;

こゝに言う「真理の内なる光」とは歓喜 (frui) の対象であるから神に他ならぬ。従って、「真理のあの内なる光の中で」とは「神の照らしの中で」という意味である。かくして、アウグスティヌスの照明説に於て問題とされる知性認識とは、真理、光、にたずねることによって神の照らしの中で mens が直視するところのものを認識者が語る (loqui), ということであり、換言すれば、認識者は「神が内側より開く

ことによって明きらかとなる事柄そのものによって教えられる」*docetur ... ipsis rebus deo intus pandente manifestis* (12-40) の謂に他ならない。

15. が、この40節冒頭の短かい叙述からアウグスティヌスの照明説の全貌を理解することは不可能である。特に、この箇所では、*mens* が真理の光の中で直視するものが具体的に何であるのかについては全く触れられていないし、更に、この問題に関連して、知性認識の対象はすべて真理の光の中で認識されるのか、それ以外の仕方では認識される知性認識の対象はないのか、といった問題も生起する。このような問題はアウグスティヌスの、特にその初期の、照明説に於ては、はっきりとした解決を得ているわけではなく、やがてそれはスコラ哲学に迄引きつがれていくのである。

結 び

16. 以上、*res* と *signum* をめぐる認識の問題を通して、アウグスティヌスの照明説の「形成モチーフ」を考察してきたが、それは次のように要約される。

第1点の「何もしるしなしには教えられ得ないのか」という問題から、我々はものをそれ自体によって認識する、という結論が得られた。このことより、「たずねる」という認識の事態が引き出されてくる。そしてそれは知性認識の場合には「真理にたずねる」となる。

又、第3点の「ものゝ認識それ自体の方がしるしよりもよいものであるのか」という問題と相俟って進められた言葉の機能の問題からは、ものゝ認識は探求か想起かによる、という結論が得られた。そして、この探求による認識の立場が「真理にたずねる」に迄深められ、それと同時に、神の照明の思想と結びついていくところに、『教師論』に於けるアウグスティヌスの照明説の最も基本的な「形成モチーフ」があったと考えられるのである。

註

- (1) 10-31. *utrum nihil sine signis possit doceri et utrum sint quaedam signa rebus, quas significant, praeferenda, et utrum melior quam signa sit rerum ipsa cognitio.*

- (2) 10·33. fortasse nihil inuenies, quod per sua signa discatur. Cum enim mihi signum datur, si nescientem me inuenerit, cuius rei signum sit, docere me nihil potest, si uero scientem, quid disco per signum?
- (3) *ibid.* quam (*sc. rem*) ... non significatu, sed aspectu didiceram. Ita magis signum re cognita quam signo dato ipsa res discitur.
- (4) 10·35. Non enim, cum rem ipsam didici, uerbis alienis credidi, sed oculis meis; illis tamen fortasse ut adtenderem credidi, id est ut aspectu quaererem, quid uiderem.
- (5) 11·36. Hactenus uerba ualuerunt, quibus ut plurimum tribuam, admonent tantum, ut quaeramus res, non exhibent, ut norimus.
- (6) *ibid.* cum uerba proferuntur, aut scire nos quid significant aut nescire; si scimus commemorari potius quam discere, si autem nescimus nec commemorari quidem, sed fortasse ad quaerendum admoneri.
- (7) 11·37. Quod ergo intellego, id etiam credo; at non omne, quod credo, etiam intellego.
- (8) *ibid.* Nec ideo nescio, quam sit utile credere etiam multa, quae nescio;
- (9) これに関連して「神の永遠の知恵が各々の理性的魂に開示されるのはたゞ、その魂が自分自身の意志の善し悪しのゆえにその知恵を受け容れることの出来る程度に応じてある」(11·38) と言われていることに注意しなければならない。「善き意志」 *bona uoluntas* は倫理的正しさの根拠となるばかりでなく、真理認識の在り方に迄関わる。「善き意志」と「神の照明」の関係は『教師論』で示唆されながら未展開のまゝに終わった問題の一つであるが、この問題の究明はアウグスティヌスの照明説の含みもつ主意的側面を明きらかにしていくであろう。
- (10) 一般に「何か(A)について何か(B)にたずねる」*consulere aliquid (B) de aliquo (A)* と言われる場合、Aについての知はBから直接認識者に伝達されるのであるから、Aの認識のためにしるしは何ら必要でない。その意味で、'consulere' は「ものはそれ自体によって認識される」という原則に相応した認識の在り方を示す。が、問題はAとBの「関係」である。特に、知性認識の場合、それは *res intelligibiles* と *ueritas* の関係の問題となるが、ではそれらが具体的には「いかなる仕方で」関係しあうのかという点については『教師論』では何ら言及されていない。